

# 生きるための大学

東京大学大学院教育学研究科教授

牧野 篤

## 1. はじめに

皆さまこんにちは、牧野でございます。いまご紹介いただきましたように、東大に移りまして今年で3年目になります。実は、住んでおりますのが、南大沢の近くの別所というところなのですが、八王子に来てから意表をつかれることがとても多いのです。今日も実は意表をつかれていまして、こんな山の中にこのような施設があることに驚いています。

これはある意味で今の学生に似ているなという印象を持っています。私たちが付き合っている学生達にはほぼ毎日、意表をつかれることがたくさんあります。皆さんもおそらく戸惑うことが多いのではないかと思います。

私は、東大に移る前ですが、それまで15年間名古屋大学におりまして学生たちと付き合ってきました。私の専門はさきほどのご紹介にもありましたように生涯学習でして、青年の問題も扱っています。今日は少しそのお話をさせていただきたいと思います。

## 2. 生きづらい若者たち

今日のテーマは重い感じになりますが、なるべく私が経験した学生の実態等をお話しさせていただきながら、学生との付き合い方を考えることができればと思います。

皆さんのお顔を拝見しますと、お若い方からご年配の方までいらっしゃる。実は、私も先日気が付いて愕

然としたのですけれども、今年の新入生は1990年、1991年生まれなのですね。バブルが崩壊する前後に生まれている学生たちなのです。そして、彼らの人生というのは、日本は良くならないといわれ続けた20年、いわゆる「失われた20年」です。彼らが大学に入ってきて、先輩を見ると就職難の時代です。実は東大生も例外ではなく、世間では東大に入れば勝ち組のような話ばかりをしているわけですが、実際彼らはとても就職に苦しんでいます。しかも、今年も、私のゼミ生で、卒論を書く学生が15名いるのですが、そのうち4名がすでに留年すると言ってきています。4月までの段階で内定が出ないので、もうやめますとって、疲れきっているところがあります。このような社会で、彼らがどういう形で自分の人生を作っていくのが課題になるのではないかと思います。

### ○解離を起す学生たち

まず、彼らはとても生きづらいのではないかと感じています。人格が多重化している感じがするのです。これはここ20年間くらいの傾向ではあるのですが、解離を調べるテストをすると30%が解離の傾向を持つ、10%が病理の段階に入っているのではないかと、私の知人の専門家は言っています。

驚いたことに、レポートを書かせると、リストカットの経験者が8~10%います。死ぬつもりはないから深くは切らないですけれども、切って血が出てきて痛くなるのを待っている。痛みを感じることによって、自分のからだにそこに存在していることを確認していく、あるいはいろんなストレスが溜まってくると切っけ気晴らしをする子もいるようなのです。

東大で私の講義を受講している学生に書かせましたら、リストカット体験者や見聞したことのある者が、大体8%くらいいました。自分の経験ではないけれども、友達のことを書いた中で、自分を大事にできない、自分の体をいじっている、または性的な関係を結ぶことによって、なんとか自分が存在していることを保とうとしている子たちがたくさんいます、ということを訴えてくる学生が増えてきています。これを書いてき



牧野 篤(まきの あつし)氏  
プロフィール

東京大学大学院教育学研究科教授。

名古屋大学大学院助教授、同大学院教授を経て、2008年より現職。

専門は中国近代教育思想・社会教育・生涯教育。

中国・台湾のコミュニティ教育・少子高齢化問題、日本のまちづくりや高齢化・過疎化

そして生涯教育など、多岐にわたる調査や執筆活動に精力的に取り組まれている。

た学生は、友達がそのようになっているのをどうしていいかわからないと言っています。このような傾向を強めている子たちが進学校の中でも出てきています。

さきほど、セミナーの中で授業の話がありましたけれど、大学ではAV機器を使うように言われるわけですが、使うとどういうことになるかという、スライドを一生懸命写すばかりで話を聞いていない。それで、最近、私はAV機器を使わないようにして、板書に戻しました。そうすると今度は板書を一生懸命写している。話を聞いていないのです。そこで最近、「ちゃんと授業を聞きなさい。聞いて自分できちんとメモを取りなさい。」と、書かなくなりましたね。昔は、資料を説明しながら教員が板書して、学生は自分で参考書を読んで、ちゃんとメモを取っていたのですが、今はとてもそんな学生はいません。

最近、特に解離を起している学生たちがそうなのですが、何となく自分と教員との間に膜があって、直接的でないと感じているようなところがあるようです。スクリーンに映っている先生をボーっと見ている感じで、何となくはっきりしない。ご飯を食べながらテレビでお笑いを見ている感じだということです。

私にだけ1対1で授業をしてほしいとレポートで訴えてくる学生たちが増えてきています。大講義での一斉授業に違和感を感じているのです。

しかも、本の読み方も変わってきているのではないかと思います。字面を追っているのではなく、写真のように見えて、ところどころ自分にヒットする単語が出てくると、そこだけを受け止めて勝手に解釈しているので、本の内容が理解できていない学生が増えていくのです。読むのではなく見る感じですね。虫食いだらけでも大丈夫、分からない単語が出てきても気にならないらしいです。コミックでも見る感じでテキストが読まれているようになってきています。

### ○自己責任の沼に沈み込む

しかも、先ほどお話しましたように、彼らは生きづらさを感じ、その上、自己責任論の中に組み込まれてしまっています。

今、ゼミで貧困問題を扱っていますが、先日、本を読ませまして、貧者・ホームレスになる不安があるかと聞きましたら、受講生40名のうち半分の20人くらいが「ある」、あと20人が「ない」と答えているのです。

彼らはこう言っているんですね。「社会構造的に、社会の環境によって貧者は作られてしまう。」 私たちの世代から言うと、だから社会を変えなきゃいけない、と思うんですね。社会が貧者を作り出しているし、社

会が格差を作り出しているし、貧困層を作り出している。だから社会を変えなきゃいけない、または福祉制度を充実させて底上げを図ったほうがいい。こういう議論をするかなと思っていましたら、違うんですね。人が社会の影響を受けて貧者になってしまうのは、その人に貧者になる資質があるからだ、と考えている。だから、社会の影響を受けて貧困の資質を持つようになってしまう。そうなる貧困者ががんばったって足抜けできないかもしれない。不安なのは、もしかしたら自分もその資質を持っていて社会の構造に共鳴して、そうになってしまうかも知れないからだと言うのです。

そして、大丈夫と言っている学生も、自分にはそういう資質がないと思っているし、あったとしても気づいているから、何とか回避して貧者にならないで済むかもしれないと思って、不安はないと言っている。そして、なってしまったら仕方がないし、なってしまったら自分が悪いんじゃないかと感じると言います。貧困になった自分が悪いのだから、自分で何とかしなければいけない、と思い込んでいる。じゃどうするの？ と聞いたら「努力するしかないけど、どうしようもないかも」と言います。

ゼミで少し議論させましたら、女の子たちがコソコソ言っているの、何なの？ と聞いたら、「先生、私たちには最後の手段が残っています。」と言うんですね。最後の手段、何だと思われませんか？ 「結婚」と思った方、古いですね。実は私も「結婚」だと思いました。「結婚なの？」と聞いたら、「いいえ、先生とんでもない。結婚なんか頼ったら、旦那がこけたら、一家貧者じゃないですか。」と言うのです。旦那がこけることを前提に結婚を考えていますから、当然怖くて結婚なんかできない、というのがうちの女子学生の意見です。じゃあ何が残っているのかというと、おわかりですか？ 「風俗」なんですね。そう言うので、「いや、風俗っていったって、その年齢だとせいぜい5～6年でしょ。5～6年であとは使い捨てじゃない」と言うので、「ええ、それでも男よりは5、6年持ちこたえられます」と言うのです。それくらいのことを考えています。「でも今の話って特殊な話でしょ」と言うので、「いえ、違います。日ごろ私たちが仲間内で話すときにも、食べられなくなったら風俗があるよね、という話をしています」というのです。

風俗に対してとても敷居が低くなっていて、ちょっと仕事がかまくいなくなったらそちらの世界に行く。そこでお金を稼いで帰ってくる、ということができないのではないかと受け止めている女子学生が増えています。

この話を知り合いの高校の教員に話しました。私の大学時代の同期で、学校の教員をやっているのですが、それを話すと「おまえ、大学はいつも遅れているな」というんです。「高校生もそうなのか」と聞くと、「そんなのは当然と受け止めなければいけない。たとえば父親が失業あるいはリストラで職を失って貧困になった、母親が勤めに出たりして大変という時に、女の子が一番行きやすいのは風俗しかないだろう」と言うのです。進学校でも女の子は風俗にとっても近くなっていると言います。

学卒で正規の職について60歳で定年でだいたい37,8年間のキャリアだとすると2億8000万円くらいの生涯賃金を得ることができます。これは税込みですから、手取りは2億円ちょっとです。しかし、今20歳を過ぎてフリーターになってしまうと、ほとんどフリーターで行くしかないという社会構造になっています。一部上場企業でフリーター経験者を採用すると言っている企業は1.7%しかない。ほとんどが新卒採用しかしません。いったんフリーターになってしまい40年間フリーターで行くと、生涯賃金は4,000~6,000万円といわれています。年収100~150万円なんですね。こういう状況の中で、しばらくは親が食わせています。親が退職しても年金で食わせていきます。でも親が亡くなった後、フリーター世代はどうするのか。

実は、初期のフリーターは現在40数歳で、いまだにフリーターです。そうすると生活保護しか残っていないじゃないかという話になるわけです。じゃ何ともしないといけないということになるのですが、彼らは、それは自己責任だと引き取ってしまう。そして、辛いと思っている。さらに、彼らは、「この社会にいるのは自分じゃなくてもいいんじゃないか」という感覚を抱え込んでしまっています。

この社会は、市場社会で、私たちを入れ替え可能にすることで維持されているようなところがあります。誰だって同じように職に就けるといところがこの社会のいいところですから、誰だって同じように職について同じように生活が出来ることを保証してきたはずなのですが、気が付いてみると、誰だっていいなら私でなくたってよかったのじゃないかと、若者が自分の境遇の責任を引き取ってしまうようになってしまった。

私が私であることの原因がわからない。一体私って何なのという形で「わたし探し」をしなければならない。そこに出てくるのは自己防衛の感覚ですね。何とかして人から大事だよといって欲しいし、そうでなければ誰かに出し抜かれてしまうかもしれない。だから、何とかして自分を保とうとして、どうするかというと、

自分のほうが優秀なんだと思い込む。ですから、すぐに人のことを馬鹿にすることになる、と彼らはいいます。何の根拠もなく勝手に相手を否定することを学生たちはよくしますが、聞いてみるとこれも自己防衛のためにやっているだけであって、本当に根拠があるかどうかはわかりません。あいつはあんなことを言っているバカなやつだと思っているところがある。

### ○格差社会の中で

格差社会の中では「勝ち組」「負け組」に分けられていて、学生たちもその影響を受けています。あまり東大のことばかりをお話するのはよくないかもしれませんが、私も東大に来て驚いているんです。名古屋にいたときには、名古屋大学というのはあの辺では勝ち組ですけど、学生は負け組だと思っているのです。就職活動を始めるとどうしても東大の連中に負けてしまう、といて卑下している。

では、東大生はどうかというと、これもまた微妙ですね。私がいるところは教育学部で文科Ⅲ類からの進学者が多いのですが、彼らは文Ⅰ・文Ⅱを見ているんですね。自分たちは文Ⅰ・文Ⅱより劣っていると思っています。しかも3年生への進学の際に進学振り分けというのがあって、成績で進学先を振り分けるのですが、偏差値が一生ついて回るんです。学部が上がってきてからは、私たちは彼らに対して、もう偏差値は関係ないのだから、自分のやりたいこと、自分の進路をちゃんと見つけることが大事なんだと一生懸命言っているのですが、どうしたって「僕は文Ⅰじゃないもん」となっていくわけなんです。

それで文Ⅰの連中はどうかというと、その文Ⅰの中でも上下関係が出来ていて、どこまでいったって抜けられないんです。そしてどうなるかかというと、一生これが付いて回るのです。だから、辛くてしょうがない。こういう社会になってしまっています。

### 3. 新しい<自我>のはじまり

こういう社会で、彼らは戦略として新しい自我を作り出していくという行動を取り始めているのではないかという実感があります。

私の専門の教育学の立場から言いますと、人格とか自我とかは、心理学の先生がたの観点とは違うかもしれませんが、基本的には社会の状況によって作られていくものだと理解をしています。

この自我という表現も、私たちは日ごろよく使いますが、150年前にはなかった言葉であって、もっといえば自我は統一されていくもの、昨日の私と今日の私

と明日の私と将来の私はずっと一人の私であるという感覚を持つようになったのは、近代産業社会という社会に入ってからであって、日本であればここ130年くらいの話でしかないんですね。そういう意味では、社会が変わっていくことによって、人々の自我の在り方や人格の在り方も変わっていくのが普通であると考え、先ほども言いましたような、自分と先生との間に膜がある、何となく違うような感じがする、ずれている感じがあるというのは、ある意味普通のことなのかもしれないのです。

たとえば、対面式の一斉授業という形式で授業をすることが始まったのも、明治に入ってからですから、それ以前はこういう形で授業をやったことはないはず。寺子屋をご存知かと思いますが、寺子屋というのも個人授業をベースにした塾形式のものです。寺子屋の絵などを見ても、とても一緒に授業をやっているような感じではないですね。一人ひとりが手習いで字を書き、お師匠さんにみてもらって直してもらっているだけで、あとの子どもは何をやっているかという、走りまわったり、喧嘩をしていたりでむちゃくちゃな状態なわけ。す。

それでは藩校はどうかというと、藩校も個人教授がベースですから一斉授業はやったことがないはず。それが明治に入り、すべての人が同じように人格を持ち、同じように生活することをベースに作られた社会の中で、人々の生活を管理していく、一貫した自我を作っていくような社会システムがつくられる過程で、このような一斉授業が成立するようになってきた。そうであれば、社会が変わっていつてしまっているのであれば、一斉授業も成立しなくなるのは普通かもしれない。

ちょっと言いにくいんですが、学生相談室ですね、心理カウンセリング等を受けるところの統計で、少し古いものなのですが、学生たちは何に悩んでいるか？

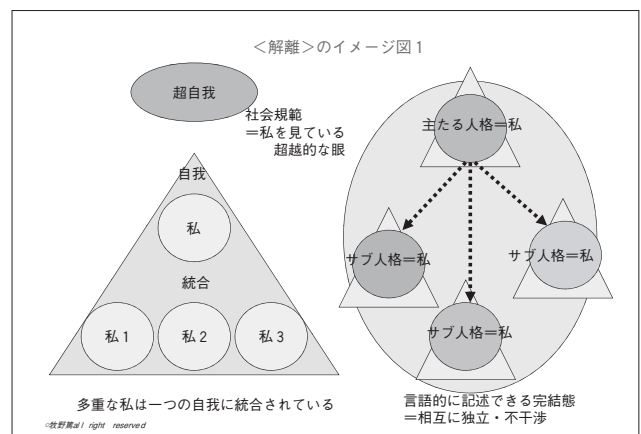
私はセンター試験の前身の共通一次テストの最初の受験者です。1979年に大学に入っています。そのころ先輩や先生方からは「新人類」と呼ばれていました。お前たちの世代から何を考えているか分からなくなったとよく言われました。広く浅くいろんなことを知っているなんて考えられない。あと、マークシートの米を塗りつぶして入ってきた奴らだと思われていて、どうもなんとなく変な奴らだと思われていたんですね。その新人類が今の学生たちのことが理解できない。もう「宇宙人」と呼んでいますけど。

人生に悩むというのは学生の特権だったはずで、私たちが学生の時に悩んでいたのは、人生・将来どうす

るかですとか、あと恋愛ですよ。付き合っている彼女をどうするのが大きな課題であったのですが、今の学生たちの大きな問題は精神保健とか対人関係で、恋愛とか人生とか、とてもそこまではいかない。今の学生というかちょっと前の学生に聞きますと、一番多いのが「抑鬱」ですね。その次に「適応障害」です。不適応。あとはいわゆる人格障害と呼ばれているものがずらっと並んでいるような状況ですけど。あと統合失調も増えてきています。昔は分裂病といわれていたものですが、学生たちはこういったものに悩み始めている。簡単にいえば、どうも自分がそこにきちり位置づいているとか、そこにきちり存在しているという感覚を持ちづらくなっているのではないかということです。そして解離を起こしていく。

自我は統合されているといいますけれど、子どもはバラバラなんです。3歳くらいまでの子どもはバラバラなんです。それを社会がきちりと、簡単に言うとトレーニングする。おしっこやウンチをそこらへんにしちゃいけないということをきちり躰けますよね。そうすると我慢しなければならぬから、したい自分を保ち続けてどこかまで行かなければならぬですよ。そういうことから始まって、きちりと「わたし」を一人にしていくという作業を社会はしてきたわけ。

それから幼稚園に入れば、今は幼稚園指導要領が変わってしまいましたからやっていないのですが、時間がきたら座って、お話の時間がありますから、たとえば15分間座ってなければいけない。そういう教育をしていたはずなんです。その中で、私たちはいっぱい自分があるんだけどそれを一つにまとめ上げていくんです。ただ、これはまとめたものなので解けやすい。



古い自我のモデルは無意識・意識・自我・超自我というような下から積み上げられたピラミッド構造で説明されます。この自我が、強いショックを受けると、人格全体に強い影響を受けてしまうので、どうするかということ、無意識の領域に抑え込んで、蓋をして、な

かったことにしておこうと抱え込んでしまう。しかし、何かの都合で蓋が開いて、ショックを受けた経験が出てきてしまう。するとまた人格が動揺することが起こる。これがトラウマということですし、それを繰り返してしまうので、カウンセラーが付き添って、本人が受けたショックを言葉にするように支援をしていくようにするのがいいです。

私たちは言葉を使って他人とコミュニケーションをしているので、自分の経験を言葉にすることで他人に共有させることが出来て、さらにそれを自分の記憶に変えることができる。記憶は操作することができるので、楽になるということなんです。経験を言葉にすることによって記憶に変えることができ、楽になっていって、自分なりの対処ができるから、そこで立ち直っていくことが出来る。

カウンセラーはたとえば鏡のような存在で、話を聞いてオウム返しに言葉を返していくことによって、その人が自分の言葉で自分の経験を語るように支援する役割を担っているのです。しかし、どうも今の子どもたちはそうじゃないんですね。ショックを受けると、違う自分にすり替っていってしまって、あまり悩んでいないのではないかと思います。人格がその都度入れ替わる。そして、自分で経験に対して言葉を与えてしまうのです。違う人格がそれに対して言葉を与えてしまうので、他人事のように処理をしてしまう。そうすると自分がやった経験なんだけれど、自分の経験になっていないという学生が出てきてしまう。

#### ○増える大学での不登校

さらにいろんな学生たちがいます。大学でも不登校がだいぶ増えてきていまして、首都大学東京はどうか分かりませんが、名古屋大学でも東大でも増えてきています。大学として困っているのは留年が増えていると同時に不登校が増えてきているということです。

FDなんかで、相談センターの先生がおっしゃるのは「出てこなくなったら気をつけてください」ということなのです。私たちからしたら信じられないですね。出てこないことのほうが普通だった私たちですから。出てこなくなったら気を付けるというのはなかなか感覚が分からないです。すみません、若い方がいらしたら申し訳ありません。私たちの世代は、大学は行ったことになっているんですが、実際にはあまり行ったことがないという場所が大学だったんです。親には行ったことになっているんですが、自分たちは行ったことがあまりない。とくに教養課程なんかはそうなんですが、今の学生たちは出てこなくなったら危ない。これはな

かなか理解しにくい、つかみどころがないのですけれど、彼らは、行けなくなっちゃう私を自分で処罰するんですね。自分の中に葛藤が起こってしまう。

最近、私の学生も出てこなくなりましたので、会って話を聞きました。そうすると、小学校のころから良くて来た。中学校で進学校に入って、ずっといい成績で来て、そして東大に入った。入ってから辛くてしかたがない。なぜかというとなんか褒めてくれない、と言うのです。つい「えーっ！」と言ってしまったんです。そうしたら「ほら、先生もそうでしょう」と言うんです。「でも、褒めてくれないって普通でしょ？ 大学では褒めないよ」と言い返したのですが。みなさん、首都大学の先生方は学生さんのことを褒めますか？ 私は、18年間教員をやってきて、学生のこと褒めたことはないのですが。学生は、やってきて普通ですよ。ね。「君はよく授業に出てきて偉いね」とか、「このゼミのレポートよかったよ」とか、「がんばってるね」とか言ったことはないです。

さらに彼は何と言ったかといいますと、小中高と12年間皆勤賞だったと。そこでまた、つい声をあげてしまったのがまずかったですけれど、驚きだったんですね。1回も休んだことがないなんて。私は高校時代はさぼり放題さぼってましたから、そういう者からみると、学校にきっちり12年間行ってしまったなんていうのは信じられないところがあるわけですけども、そういう風に褒められ続けてきたわけなんです。そして東大に入った途端、だれも褒めてくれなくなったとあって、すごくショックを受けている。それでショックを受けられても困るんだけどという話をしていたんですが、そういう学生たちが増えてきています。

何が起こるかという、行きたくなくなるのですが、行きたくない自分を責めるのです。それで、行かないきゃならないし、なんで行きたくないんだ、たとえば親が期待しているだろうと思ってしまって辛くて仕方がない。自罰的になってしまって、どんどん行けなくなってしまうのです。ここで身体症状に訴えて、熱が出たりして休めば、ある意味、合法的逸脱というんですが、病気だから仕方がないでしょと、自分に言い訳ができるので、また出てこられるようになるんですけども、なかなかそうはいかないですね。

さらに下手をしたら、友達や彼氏や彼女がいたりして、共感的他者と言いますが、「うん。よくわかるよ君のこと」と言ってくれたりすると、また問題が起こってしまう。いわゆる共依存という関係に入ってしまう。相手が悪い状態であるところに自分がいることによって、相手が自分を保っていると思ってしまう。そうす

ると相手が悪い状態であるのを助けようとして、また、自分が助かりたいと思っているのに、悪い状態から立ち直ってしまうと自分がいなくなるから、相手や自分を悪い状態に置き続けようとしてしまう。これが共依存なのですけれども、そういう関係に入ってしまう。しかも、それを恋愛と間違えている学生がたくさんいます。

そうすると、恋愛しているのに潰しあっている関係になってしまって、出てこれなくなってしまう。男の子も女の子も二人ともいなくなるんですね。それで、会ったり話を聞いたりして二人を切り離していくことになるのですけれども、なかなか大変です。

### ○自己愛型・自己実現型ボランティア

もうひとつは自己愛になるのですが、さきほどの「自分だけに授業をしてください」というのに近いですね。認めてもらえない自分が辛くてしょうがない、だから先生、私のことを認めてください、というわけなのです。または、自分がそこにいることがかけがえない、誰かとは取り替えられないんだと思いたいという学生が増えてきています。

ボランティアでもそんなのが増えてきているのです。学生たちが積極的にボランティアをするようになって、社会的には大変良いことだとなっているわけなのですけれども、社会学の先生方は意地悪な人が多くて、ボランティアっていいことをやっているのに、絶対裏があるだろうと調べ始めたら、このような結果が出るということがずいぶん前から言われています。

ボランティアは貢献なのか、面白そうだから行っているのか、嘘っぽいと思っ行って行っているのかの因子分析を行ったのです。

一つ目は、「困っている人がいるから行かなければいけないんだ」、二つ目は、「何となく面白そうだから行ってみよう」、三つ目は「何となく嘘っぽいよね」で、相互に排斥しあう因子を取り上げて傾向性を調べるのですが、従来はだいたい三つのパターンに分かれていたのです。つまり、伝統的なまじめ派、醒めた傍観者派、それに遊び感覚派です。しかし、90年代以降4つ目のパターンが出てきていると言われています。それが、「イケイケ派」というもので、互いに排斥しているはずの因子が全部プラスにふれてしまっている学生たちがいるんです。普通では理解できないのですが、貢献をしたいし、面白そうだし、嘘っぽいと思っっているという結果が出てしまうんですね。

この解釈ですが、「自己実現」のためにボランティアに行っているのではないかとされています。たとえ

ば、阪神淡路大震災の時にもこの結果が出たと言われていますが、あの時も全国各地からたくさん若い人がボランティアに行きました。行ってどうなったのか。これは報道の問題もあるかもしれませんが、どういうイメージで行ったかという、テレビに瓦礫の山が映っていて、被災者がそこで生活をしている。それを見て、自分もそこに行って、瓦礫の山を汗水たらして走り回って、被災者を助けている“私”、“美しい私”がそこにあって、「あー生きている」と実感できるかもしれないと思っ行った人がとても多いということが分かっています。そんなのばかりが来たら、現場が混乱して困ってしまいますよね。行ったらどうなるのかという、テントがあって、はい並んと言われ、登録しなさいと言われて、番号を割り振られて、何番さんバケツリレーに行きなさいと言われて、その通りに動くしかないんですね。そうするとどうなるかという、「こんなはずじゃなかった」「こんな元の生活と同じじゃないか」「もっと僕は活躍しているはずだったのに、なんでこんな番号振られて列に並ぶの？」とまたショックを受けて帰ってくる人がとても多かったことが分かっています。そういう意味では、ボランティアは大変良い話ではあるんですが、何となく自己愛的になっている。他人のために何かをするのではなく、自分のために、つまり自己実現のために他人を利用するという形になってしまっていると言われ始めています。

### ○自己実現のための「天職」探し

職探しも自己実現のためにしている感じなのです。 「天職」を探していると彼らは言いますが、社会全体でそれを煽っていますから仕方がないかもしれませんが、仕事を身につけようとか夢を作ろう、実現しようとかではなく、今あるものを探している、本当の自分を探しているという形で職探しをしているんですね。

私たちの上の世代、親の世代から言わせると、私の父も技師でしたが、たたき上げの技師から言わせると、そんなのは甘っちょろいわけですよ。 「なにバカなことを言っているんだ」と一蹴されてしまうかもしれないです。職について、そこで一生懸命にやっっていて、それが身につけていくと創意工夫が生まれ、自分の仕事を改良しながらもっと力が発揮できるようになっていって、それが天職になるのだ、と彼らは言うわけです。天職なんてどこかに転がっているようなものではないと言います。

しかし、私の学生たちも含めて、転がっている天職を探す。ちょっとやってみて合わなければ、これは天

職じゃなかったと言って次を探すというように切り替えていくような感じになっています。

そしてさらに、人と違っていると言われたいんですね。これは名古屋大学の学生も東大の学生もみんなそうなんですけれども、大講義でアンケートをとったりするんですが、8割か8割5分の学生が「自分ではまだわかっていないが、自分には人と違って、すぐれた能力がある」と思っているというのです。そして、それを見出してくれない社会が悪いと思っているわけです。なんとなく機動戦士ガンダムかエヴァンゲリオンみたいですけども。社会が自分のことを認めてくれないとひがんでいるところがあるのですね。

自分を開発し、自分をアピールし、自分できっちり仕事を作っていくという行為でなく、自分に合った仕事をくれないからいけないとか、大学が自分を認めてくれないから僕はこんな状態なんだと恨んでいるところがあります。だから教員が刺されちゃうのかなと思ったりもするわけですけども、怖いですね。

#### ○バラバラなままの人格

恋愛もそうです。私たちの頃は、どう告白するか、どう戦略を立てるかということをどきどきしながらやっていたわけなんです。たとえば一目ぼれした子に声をかけて、どう告白をし、その後のことについてどう戦略を立てるかということを考えていたはずですよ。

今の子どもたちはそうではなくて、登録して待っているんですね。出会い系なんかに登録して、紹介されるのを待っている。恋愛するということの駆け引きですとか、相手に告白するというどきどきしている感じをあまり持たないですね。

そして、紹介されて付き合ってもうまくいかないと、はいさよなら、という話になるわけですし、あまりどきどきしないので、声をかけて簡単に断られたりすると、僕のことを認めてくれないと怒ったりするわけなのです。

そういう意味で幼稚な全能感を強く保持したままになっている。ある意味でバラバラな自我といいますかバラバラな人格のままきってしまう。そして、自分が社会にきっちり位置づいていて、過不足なくきっちりあって、そして生きているという実感を強く持ちながら生活出来ているという感覚を持たない。その上で、からだに飢えている。

今流行っているのが、身体を加工するということですね。手を切ってみたり、あちこちにピアスの穴を開けてみたりするわけですよ。

うちの学生でもいっぱい穴をあけているのがいるのを見てみたんです。「痛くないの？」そうすると「痛いっすよ」というので、「じゃ、なんでそんなにつけてるの？」と聞くと、「先生、わかってないなあ」と言われたんですけど、分かりたくないですね。痛いのがいいんだそうです。今流行っているのがプチ整形ですね。あと、見えませんが刺青を彫っています。いま、女子中学生も刺青を彫るのが流行っていて、自分で彫るんですね。それから耳にピアスをあけるのも自分でやるんです。痛いんです。どうやってあけるかご存知ですか？ インタビューしたことがあるんですけど、水で冷やして安全ピンを火であぶって、ぶすっとあけるんです。痛いんですね、すごく。でもそれがいいんだそうです。なぜかという、誰誰命というのがあって、その子のために自分で痛みをこらえているという感覚があったりですとか、痛いという感覚を持つことによって、私がここに存在しているんだと強く思えるからなんだそうです。性的な関係もそういうところから入って行くのですね。

それから、授業も90分間座っているのですけれど、意識がどこかに行ってしまう学生たちがいます。私も自分の子を育てた経験がありますけれど、子どもは座らせていても、どこかと交信していなくなってしまうことがよくあります。宇宙人と交信してどこかに行っていて、また帰ってきて話を聞いているということがありましたけれど、学生にもそういう者たちが増えてきているような気がします。授業中にこうして話をしている、気がつくとなんとなくいない学生たちがいるんですね。顔はこっちを向いているのですが、誰かと交信しているなというのがいっぱいいるんですね。そこで、しょうがないので、「はいっ！」とか言って手をパンと叩くと、こっちに戻ってくるんですけども、「では、今日の宿題。この授業で私が何を言ったか、概要を書いてきなさい」と言うと、あとから学生たちがどーっとやってきて「困ります」というんですね。覚えていない、分からない、そういう学生が増えていますけれども、解離を起していたんだなと思います。

#### 4. 心脳コントロール社会に生きる

##### ○心脳マーケティング

それを強化するような社会が、いま出来上がってしまっています。「心脳コントロール社会」とか「ニューロコントロール」と言いますが、私の知り合いの経営者たちが最近よく言うのは、考えさせないで、脳神経のレベルで反応を引き出しながらモノを売ってこう

というようなやり方なのです。ニードではないのです。何が必要かを考えさせながら需要を掘り起こしていくのではなくて、デマンドみたいなもの、直感的にそれが欲しいか欲しくないか、また手が出るか出ないか、という形のやり方なのです。これは人格を相手にしないマーケティングの仕方、売り方なのです。

もう少し言いますと、日本社会では、80年代の半ば以降、経済発展が頂点に達した段階で、家庭単位の消費から個人単位の消費に切り替えられていったという経緯があります。そして、その中で個人の嗜好がとても強調されていって、人と違うことがよいことであり、社会全体が同じものを求めるのではなくて、各個人が違うものを要求しなさいという風潮になっていく社会になったのです。それが、1990年代後半です。さらにそこから個人の嗜好も細分化されていき、人格を相手にしないような売り方になってきています。

この時の問題は、要るかい要らないかの判断をするのではなくて、むしろ好きか嫌いかという感覚の問題に商品のあり方が切り替えられていく時代に入ってきたのではないかということです。たとえばコンビニが使っているPOS（ポイント・オブ・セールス）というシステムですが、商品をレジに持っていくと、キャッシャーの人がまず2つのボタンを押すのですが、何をしているかご存知ですか？性別と年齢を押しているんです。そのうえで、レジを通すと、本部のほうでデータを管理していて、その店の客層が分析されます。その店にはどういうお客が多くて、どういうものを好むかのデータをとって、その店のモノがなくなる前に、その店のお客が好むものを送ってくれるんですね。そうするとだんだんその店の品物の構成が良く使う人が好むような構成になっていくので、その店が行きつけの居酒屋のようになっていく。それで、気になるからしょっちゅうのぞきに行くようになってしまう、というのがPOSのシステムなんです。

「あ、いいものがある」とあまり考えないで手が出るようになってしまうのが、コンビニのシステムなんです。大学内のコンビニもそうになってしまうと、おじさんが行く場所がなくなってしまう。だんだん若い子向けのものになっていくので、私などは欲しいものなくなってしまうんですね。

これをもっとうまく使っているのがネット通販なのですが、アマゾンなんかでも閲覧歴とか買ったものの傾向がとられていて、開くと私の好きそうなものが出てきます。しかも、バナー広告もどんどん好きそうなものが出てくる。そしてヒット率が高くなる。そうになっていくと、従来のテレビを使って全ての人々に同

じように宣伝をしなくても、バナーが出てくるだけで売れてしまうということが起こる。さらに携帯電話の決済サービスでは、携帯電話がキャッシュ代わりに使えるようになってきています。そうすると、使った履歴をデータとして全部取られていて、たとえば、私がイタ飯屋さんで使ったとすると、あなたのお好きなイタ飯屋さんありますという情報がでてくるようになってきます。それは私の人格とかには関係なく、私がスパゲッティが好きでその中でも何が好きかということが分かっていますから、そこ、つまり味覚に訴えかけてくるわけです。

そういう意味では、個人が判断することを待たずに社会が動いていきますし、判断することを求められていない社会の中で、彼らは生活をしているという面があります。私たちの嗜好というか癖みたいなもの、好き嫌いのようなものがデータベース化されながらモノが提供されて行く。そしてそれを持つことによって、俺は他人とは違うんだと思えるよ、ということが社会的に言われる社会になっているんですね。



#### ○自我ではなく「器官」

本当は選択させられているのに、「あなたは自分の好きなものを選択したんでしょ」「あなたはこれを選択した。他人とは違って本当に素晴らしい」と言われているような感覚を持つようになっていく。そして、よく言われているのが、この心脳マーケティングは、人間の古い脳を使っているということです。簡単に言えば、「器官」というのが利用されている。私たちの言葉では「自己の嗜癖化」と言いますが、自分が癖になってしまっていく。どんどん自分が好きなものを提供され、どんどん買いなさい買いなさいといわれ、それを買うことによってあなたが自分らしくなっていく、と言われ続けるんですね。いくら食べてもいくら飲んでも、いくら身につけても満足はこないわけですから、どんどん買い続けなければいけない、どんどん食べ続けなければいけないのです。



そのような状況の中に彼らは置かれているのではないかと思います。そしてその中で「あいまいになっていく私」の本当の姿を求めて、たとえば身体が存在をどこかで感じていくために、身体を加工していくのではないかと思います。

そこで今出てきているのが、自己愛的なもの、オンリーワンの趣向ですね。自分が唯一であるということです。スマップの歌に「世界に一つだけの花」というのがありますが、私たちから言わせれば「世界に一つだけの花」なんて“ナンバーワン”に決まっているだろうと思うんですが、“オンリーワン”なんですね。人と違ってあなただけが大事と言われたい。それが自分を保つ手段になってきています。すべて、そうしてもらわなければいけない。自分で作り出していくのではなくて、簡単にいえば、どこかにいる超越した神から、自分の好きなものをどんどん与えられるような生活をしていますから、万事そうしてもらわなければならない。だから自分の隠れた能力を大学が引き出してくれるべきであって、なんでしてくれないのか、というのが彼らの感覚なのです。ですから東大に入ると、東大は日本で一番面倒見の悪い大学ですから、何もしてくれないと言ってショックを受けてしまう。何もしてくれないと言って恨みに思っている学生が結構います。

## 5. 社会全体の解体

### ○民衆を国民化する

さらにこれは社会全体の問題としてもどうもズレがあるんじゃないかと思うのですが、従来の私たちの社会というのは、近代産業社会で大量生産・大量消費をベースにしながら、そこでコツコツとモノをたくさん作ってそれを売っていく、しかも買う側のほうも、私たちみんな同じ国民だよ、日本人だよという気持ちを持っていて、同じものを欲しがることが前提で社会が作られていたのです。

それがさらに、アメリカを市場にしたり、世界を市場にしてモノを売っていくという社会になっていくわけですが、基本は大量の同じような労働力であり消費者である人をたくさん作りながら、市場を拡大していく、簡単にいえば、同じようなものをたくさん欲しがるといことを前提に作られてきた社会です。それを私たちの言葉で「民衆を国民化する」と言います。これは、学校を通して基本的にはやってきました。産業的身体を作るという言い方をしますけれど、一つは時間の在り方を自然時間から時計時間に切り替える。ですから、大学の1時間目も何時何分からと決まっていますよね。小学校・中学校・

高校も全部同じですね。夏も冬もかわりなく、時計時間で自分の仕事をするような訓練を一生懸命してきたわけです。

身体所作もそうですね。たとえば私たちは普通にこういう風に直立で歩いていますけれど、明治以前の日本人はこういう風に歩いていなかったんですね。これは軍隊の歩き方なんです。どうやって歩いていたかという腰をちょっと落として、前かがみになって歩いていたのです。これは楽ですよ。ぎっくり腰だとこれくらいに歩くとすごく楽です。江戸時代の農民たちは身体に負荷がかからない歩き方をしていたんですが、それが明治以降は富国強兵政策で、身体改造も行われて、歩き方も全部矯正されたんです。腰を伸ばして、かかとを上げて膝もあげて歩くようになったんですけども、全部学校で訓練してきたんです。また、兵式体操も取り入れられて、これはラジオ体操の前身ですが、オランダから入れた兵式体操で、身体所作の改造を行ったのです。

さらに、言語、国語を作って統一してみんなが同じ言葉を使うようにして同胞意識を作ってきた。こうして市場を作ってきた。さらにその中で、時間軸に沿って自分が発達していく。「私」というものがベースにありながら大きくなっていったり、知的なものが増えたりする「私」といったものを作り出してきたんです。価値と時間の管理ですね。

その上、小学校の学区は旧町村と重なっていました。現在も自治会や町内会と重なっているはずですが、これは空間の管理をしてきたわけなのです。そして、価値と言語と時間と空間を重ね合わせながら、日本という国は人々をこの日本という国の正式メンバーという形で育成してきた。

### ○価値観の解体

それが壊れ始めたのが1985年以降です。まず、価値の解体がはじまりました。バブル景気で言われているように、消費のあり方が「おいしい生活」ですとか「欲しいものが欲しいわ」という、個人ターゲットに切り替わっていくのです。そして、他人と違うことが良いということが強調されて、国民の価値が解体していきます。

本当は、「私たち」というのは、みんなが同じに入れ替え可能だからこそ、社会に参加することが出来るし、同じ私たちなんだから、相手から私を見ることが出来る「私」がそこにいるという形で自我が確定されていたはずなのですが、そのころから共通基盤の「私たち」が壊れていきますので、残ったのが「入れ替え可能な

私」だけなのです。そうしますと、一体私はなぜそこにいるのか？なぜ位置づいているのかがはっきりしなくなる社会が90年代以降やってきてしまったんです。その中で「私探し」が始まるようになってきた。職探しも、実はバブルのころはマクドナルドのアルバイトが時給2,000円だったんです。その頃は学生が一番金持ちでした。今は時給800円ですからね。そんな時代に正規職に就くのは馬鹿らしかかったですね。そんな時代がやってきて、社会全体の勤勉という価値が壊れていったんです。

そのころ出てきたのが援助交際で、存在そのものが売買の対象になっていく。高校生と「しるし」が付いた存在が売買の対象になっていく、モノを作る意味がなくなっていく時代に入っていったわけです。

さらに00年代に入って、価値と言語と時間が壊れていく中で何が起こったかという、空間が壊されていく時代に入りました。簡単にいえば、コミュニティが解体しはじめた。少子高齢化の中で機能しなくなってきたコミュニティがたくさん出てきました。さらには平成の大合併で学校の統廃合がどんどん起こっていきます。その中で空間的な自分の存在の場所がはっきりしなくなる時代がやってくるようになった。

その上で、さらに、そういう風になったのはあなたたちの責任なんだから、自分で何とかしなさいよ、という形で、自己責任論が喧伝される時代に入ってきています。この意味では、若い人たちを中心にして自分の所在の無さが彼らをむしばむような時代になってしまったのではないかと思います。その中で「私探し」を一生懸命しているわけなのですが、本当は探せるものじゃないはずです。作り出すものであったり、相手との関係の中で自分を認知するものであった「私」が、探すものになってしまったのです。そして、探し出せないからと言って、探し出すためには自分らしいモノを消費しなさいという形で「自己の嗜癖化」が強要されるようになってきています。

## 6. 人が学ぶということ

### ○「つながり」をつくりだす試み

今後、私たちが何をしなければならぬかという、新しいつながりみたいなものをきちんと作って行って、大丈夫なんだよという関係をどこかでつくってやらないと、彼ら若者は辛いのだろう、と思います。

一つだけ実践例を紹介します。今、私たちがやっていますのが、農業中心なんですけれども、過疎地の中山間地の支援事業も含めて、若い子たちが自分を取り戻しながら過疎地の支援もして行って、農業で食べら

れるような仕組みも作りながら、収益を社会還元しようというような実践です。

彼らが何をやっているかという、新しい農業をしているのですが、本当は自分達がそこに生きがいを作っているという面があるのです。さらに彼らは、地域の人々の間に入って、高齢化率のとても高いところで、見守りをしていきながら、一緒に生活をしています。

さらに、私たちが支援している学生農業ベンチャーのメンバーは流通も新たにつくっていて、消費者と対面販売をして対話を進めながら、自分を認めてもらい相手を認め返すという循環をつくり出す中で、モノが売れていくという関係を作ろうとしています。今まで彼らがある意味で恨みに思ってきたような、自分は認めてもらえないとか、自分は何の役に立っているのかははっきりしないとか、あるいはこの社会に十全に位置づいているのかははっきりしないといったことに対して、むしろ農業ですとか農作物の流通を新たにつくり出し、それらに従事することによって、自分がそこに位置づいているという感覚を強くもつようになる。それをベースにしてお客さんと対話をし、農家の方との対話をしながら新しい産業を作っていく。こういう試みが進められています。

このプロジェクトは今年の4月から新しく生産に入っていて、今年目標は、年間ひとり400万円の年収を得ることなんですね。「やさい安心くらぶ」という流通を作っている側のほうは、一人あたり月額60～100万円売り上げています。それをベースにしながら、農村に4割返していますので、農家の方も潤っていきますから、この過程で彼らが自分の存在をそこにきっちりつかんでいくことが出来るのではないかと感じています。

こういうことを私たちが社会の中につくっていかねばならないだろうと思います。

### ○相互に承認しあい信頼しあう

相互に信頼しあえる、自分のことを認めてもらいながら、相手を認め返していく。私たちという存在は、単なる交換可能な存在で、自分でなくてもよかったんじゃないか、ということではなくて、交換可能な私たちであるからこそ、相手を通して自分のことを認めることが出来るんだと、自分はその中にちゃんといるんだという感覚をしっかりと身につけさせることだろうと思います。

これこそが大学の中でなされるべきことではないのかと思います。大学はまだ社会に出る前の段階ですか

ら、モラトリアムかもしれませんが、準備期間でもあるはずですね。その中で、彼らは仲間や教員や職員との関係の中で、お互いがきっちり認めあえているのだ、そこに存在していることを認めてもらえているのだという強い感覚をもつことができるようになる。このことが重要なのだと思います。それをベースにしながら、たとえば授業なり講義なりの中で何かをやってみること、学んでみることによって、自分との間に、さらに自分と他者との間にオーバーアチーブな関係が出来る。

何かをやることによって、あとから自分がこんなことが出来たと発見をするわけです。事前に分かっているわけではないのです。学びというのは基本的にそうです。学んだあとから、あー、こういうことがわかった、出来るようになったとわかるわけですから。そしてその驚きや嬉しさをベースにしてもっと学ぼうとすることを、私たちの言葉でオーバーアチーブメントの

循環といたりしますが、そういうどンドン前に行こうとするような関係を彼らに作ってやるのが、この社会の中で求められていることではないかと思うわけです。彼らはそこで、自分に対する駆動力を獲得することになります。

大学の中でこの関係をきちんと作ってやることによって、彼らが自己愛的になり、もっと自分のことを見てほしいとか、社会関係・人間関係の中できっちり位置づいている感覚をもてないと苦しんでいる中で、少しでも自分がきっちりそこにあるのだということを彼らに実感させていく、そういったことがこれから私たちのアプローチとして必要なのではないかと思います。そうすることで、大学は彼ら学生にとって生きるための拠点へと変わっていくのだらうと思うのです。

少し話があちこちになってしまい、すみませんでした。以上で終わります。ありがとうございました。

